

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：金沢市東山1-38-30・松魚亭

TEL <0762> 52-2271

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：沢田哲夫 幹事：米沢修一

情報委員長：春田義正

1986・2月6日

第308号

石川県の未来展望

石川県企画開発部長 岡本一夫氏



石川県が21世紀にかけて抱えている問題、やらねばならないことはたいへん数が多い。その中で私が直接所管しているのは、新幹線問題、能登振興問題、小松空港の今後のあり方の問題などである。私の仕事は青写真づくりが基本であり、企画開発業務の中でのプランニングというのは、21世紀にかけて地域の活性化を図ろうというのが唯一のポイントになっている。ただ、今やもうある意味では成熟した社会になっているが、社会が成熟してくると実は財政的に金

が無くなる時代と全くイコールだ。これは、国も地方公共団体も同様な状態だ。そういった点での気苦労といいますか、青写真を書く難しさというものが、一方の課題になっているのが現状だ。

ご存じのとおり、県庁には土木部だとか経済部だとか教育委員会とかいろいろな部局があり各部局が実戦部隊として活動する訳だが、私ども企画開発部は、企画業務と実戦部隊がうまくマッチしながら業務を進めていくのがポイントになる。

将来的に県のあり方といった点に着目した場合、これからの高速交通時代に対応する施策をきちっとしなければならない。地域経済の一番の根源をなすのは、やはりそういう高速交通体系に乗り遅れないことが北陸の浮上であり、浮上というよりも全国的に取り残されない対策というのがやや消極的になってきている。今や東北や新潟にも新幹線が走っており、こと新幹線に関しては完全に後進地域になっている。これは大変残念なことだ。皆様はその辺のことはいろいろお聞きになっていると思うが、東北の先端誘致産業は山形県が全国一だ。これは一方で矛盾したことになる。地域開発のための地域の熱意というものと新しい交通体系に支えられた地域経済の浮揚というものと、イコールでありながら必ずしもイコールでないという問題を投げかけた状況の中での地域開発が行われているということだ。スピードにのった新幹線の問題というのは財源問題だけだ。61年度の国家予算において、例えば民活を中心とした内需拡大ということで東京湾の湾岸横断道路の予算が取り上げられた事実、明石大橋も同じだ。また、関西新空港についても本格的予算が計上されているが、北陸には何も無い。新幹線の予算については確かに50億円ついたが、前年度よりも大きく変化

(つづく)

はない、継続しているという状態だ。具体的にそれだけのプロジェクトの金が落ちるような仕事があるかという、公共事業の抑制とあいまって非常に淋しい状況だ。公共事業の61年の国のやり方を見ると $\frac{2}{3}$ の補助率を $\frac{1}{2}$ にして、その分地域の負担が増える。国は公共事業推進の総量だけは確保しても、地域が今度はついていけなくなった。そういった財源不足のなかで、建設のため何がなんでも金をやり繰りしながら仕事をしていくという訳になる。第三次総合計画で、国土の均衡ある発展とうたっている政府にとっても北陸新幹線抜きにして地域の均衡ある発展というのは考えられない。新幹線問題は、今後の経済活動、観光面の問題、あるいは企業誘致の問題も含め1つのキャスティングボードをにぎっているということがいえる。最近の工法ですから、これがスタートして6年でもものになる。必要財源のやり繰り算段が論議され、早く東京からまず小松まで、そして小松から大阪までという建設を促進していくというのが当面の課題であろうと思う。

次の問題は、能登振興に絡んだ問題だが、これも新幹線がきて初めて能登の浮上というのが現実になるだろうという風に思う。今、能登の人口は残念ながら減るべくして減っていると見ざるを得ない要素がたくさんある。例えば、能登に若い力を結集しようということにしても、個々の思いというのが集結して大変な力になっていく訳だから、能登振興というのは青写真を具体化してそこへ地域の人間が定着していくまでにはまだまだの道程であろうと思う。そうかと云ってこまねいている訳ではない。金沢から珠洲の突端まであれだけ立派な道路のある半島というのは全国にない。問題は今後どのようにして展開するか難しい要素があるが、新幹線を持ってきてしかも高速道路から能登有料道路へスムーズに突入できるような道路を、早くやらねばだめだ。こういうものを全部準備しなければ企業はこない。能登の振興のため、市町村が一本になって真剣に取り組んで欲しい。現状では、奥能登へ企業をといても無理で、そういう意味で県が努力しようとしているのは珠洲地区に原子力発電所の電源立地をつくってはどうかと考えている。副知事と一緒にそれに全力投球すべく頑張っている。

第三に、小松空港の問題ですが自衛隊と一緒にしているので何かと都合が悪いというご指摘がありますが、確かにその通りだ。しかし、今の状況の中ではあれが精一杯でしょう。というのは、北陸の人達が利用する飛行機の需要というのはいいところへいつている。更に、新しい問題としては、例えば広島へ飛ぶ飛行機を、那覇便はほぼ具体的になっていますから大丈夫でしょう。南九州はどうだとか、仙台はすでに運航しているので東北のネットワークは大丈夫だ。そういった問題が今後あるでしょう。小松空港の今後を見守りながらチャンスがあれば是非、自衛隊を奥能登へもってきたいということは考えている。これは自衛隊の問題であり大変難しい要素がありますが、奥能登の人は是非きて欲しいという強い願望があることだけはまちがいない。努力して将来、奥能登に空港をもってきて、珠洲に一千万キロの原子力発電所を建設し、一方では、観光基地を、珠洲の八が崎や羽咋の千里浜にしてもすばらしい観光資源を生かした投資をして長期滞在型のレクリエーション基地にしないと能登の将来はない。プロジェクトというのは十人十色で、色々な考え方があるのもわかるが、20年先、10年先の石川県をどうすればよいかと考えた場合は、反対ばかりも困る。そういう問題がこれからたくさんでてくると思うが、今後とも県のためにご支援、ご協力の程よろしくお願いしたい。

—金沢北RC例会講話より— (文責 小坂友夫)

私の名刺

岡田 進



この度、浅田豊久様と合田昌英様のご推薦をいただき、金沢北ロータリークラブに入会させていただくことになり会員の皆様方に対し心より感謝申し上げます。

私は、昭和22年8月7日に能登の門前町で生まれ、金沢大学法文学部を卒業し、青息吐息の思いで司法試験に合格し、現在、金沢市尾張町1丁目9番11号において弁護士を開業していますが、弁護士業務について9年目でございます。弁護士の経験年数からみても大したことはないのですが、日頃自分の仕事について感じていることを述べさせていただきたいと思います。私が担当する業務は、一般民事事件及び刑事事件が仕事の大半を占めるものでありますが、弁

護士が一般民事事件において、依頼者の利益を代弁、擁護する際、事件の相手方から憎悪されるか少なくとも好意を持たれることはありません。

時として、相手方の代理人となっている弁護士からも憎まれることがあります。弁護士は裁判官と異なり、依頼者の利益の代弁者であるため、相手方からみれば考えられぬことを法律を武器として主張することになることも多々あります。(もっとも相手方が納得しているような事案は訴訟にもちこまれることは少ないと思いますが)。このような場合、事件が紛糾することになりますが、相手方にとって考えられない主張でも依頼者からみて当然のことであれば、相手方に憎まれようと、主張していかざるを得ないのであります。また和解交渉で依頼者を説得しようとするとき、その依頼者さえ弁護士に不信不満の念をもつことがあります。敗訴した場合は、依頼者はその気持を強くします。依頼者は、自己の利益を主観的に確信している場合が多いからであります。自己の主観的利益を信ずることのできない人は訴訟をすることが少ないからです。一方、弁護士が刑事事件において凶悪犯や政治犯を弁護するとき、今日のように報道関係が進歩した時代では、一般の人々は弁護士を被告人と同視し、非難することがあります。社会より嫌われている人々を弁護することも、弁護士の崇高な任務であることを一般市民に理解してもらうことは困難なことに思われます。しかし、他方では、弁護士は正義の味方、弱者の味方と見る人々も多いのです。

ところで、新入会員研修会するとき、大場松魚先生をはじめ諸先輩の会員の皆様から、職業を通じて社会に奉仕することがロータリーの会員としての第一義であるとお話をいただき、自分の職業について考えると非常に大変なことだと思いつつ同時に、身のひきしまる思いが致しました。

今後、私はロータリーの会員として先輩諸兄の御指導をいただき、出来るかぎり努力する所存でありますのでよろしくお願い致します。

今週の花

吉山 宥海
(1月23日)

土 佐 水 木
京 わ び す け
石 (せきしょう) 菖



